
ランダムドリームワールド！

エクストリーム使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ランダムドリームワールド！

【Nコード】

N5295Q

【作者名】

エクストリーム使い

【あらすじ】

全てがほのぼの流れる世界、特に争いもなく平和な時が流れているなかであの家族にとあるピンチが訪れていた。

岡崎家の三人、岡崎智也に岡崎渚、

そして二人の子供である岡崎汐はテーブルを囲んで座っていた。

「金欠です！」

そんな小さな家族の問題から多くの人々を巻き込む大問題へ、

自由気ままな？大波乱の日々が幕を開ける！

作者の自己満足に近いクロスオーバーです〇(^ ^)〇

苦手な方は回避を、

更新は不定期ですが、間隔は成るべく開けないように行きたいです

(^ - ^) /

脱金欠？アツキーのソリオン作戦！（前書き）

この小説は、様々な作品を混ぜて作者の自己満足に近いクロスオーバーとなっっている作品です。

二次創作やクロスオーバーが苦手な方や、

作品内のCPが気に入らない方などは回避をf^_^ (^;)

それでもよろしい方は、どうぞ後ゆっくりお楽しみ下さいm(_

—) m

脱金欠？アツキーのソリオン作戦！

「金欠です……。」

「へ？」

いきなりのセリフに岡朋也は間抜けな声を出してしまった。

声の主は何を隠そうこちらに向かい合って座っている岡崎渚。

渚は親からの遺伝であるアホ毛をびよこんどと揺らしながらも真面目な顔で再び口を開いた。

4

「ですから金欠です、朋也くん。」

「金欠？。」

「キンパツ？」

「いやそれは昔の春原の事だぞ、汐。」

などと岡崎家特有のアホトークをしながらも、智也はもう一度聞き返した。

「ははは、何かの冗談だよな。」

うん、何かの間違ひのはずだからな…

我が家が金欠？

ようするに高校時代の春原と同じ状況？

春原と同じ？あのヘタレと、

あの人でも無い物体と？

いやだ、死んでも御免だ。

たのむ！冗談であってくれ…

「本当です。我が家の家計はピンチです。」

駄目でした…

ガラガラと俺の中のプライドと言う塊が崩れて、春原ウイルスによつて汚染されて行く。

ああ、渚、俺を導いてくれ…

「朋也くん！ちゃんと聞いてください。」

全てが無になり現実から逃げだそうとしていた朋也を渚が引き戻した。

横では渚と同じ態度で汐が両手を机に当ててぷくりとほおを膨らませてこちらを見ている。

これは素晴らしいな。
おっさんがいたならまず間違いなく「グレイトオオ！」とか言って
卒倒しそうな勢いだ。

ていうか、
やばい…

「ところで渚、何で俺たちが金欠なんだ。」

再びどこぞやの世界へ飛び立とうとしている自分の意識をより戻して話を進める。

渚は困った様に化粧棚となっている机の右端にある少し大きめのダンボールを取り出した。

何が入って居るかはそれなりに想像が付くが……

「原因は汐ちゃんがどうしてももってねだったので買ってしまったあのぬいぐるみです。」

渚は説明しながら丸くて青や緑色やピンクの謎の生命体をかたどったぬいぐるみを大量に取り出した。

これはあれだ、団子だ、もうそうとしか言いようが無いくらい団子なんだ。

「はい、ダンゴ大家族です。」

渚が嬉しそうに微笑んだ。

横では汐が取り出したうちの一つを手に抱きかかえながら鼻歌らしきものでダンゴ大家族の歌を歌っている。

なるほど、理解できた。

家族で買い物に行った。

汐がダンゴ大家族を見つける。

欲しがる。

俺的にはまあ買ってやるかとの気持ちだったのだが渚も急に欲しかった。

仕方なく四個買った。

なにやらそれがシリーズで集めるタイプだったらしく、それを大量に買い込んだ。

金欠になった。

そうかそう言う事が、
ようやく理解した、

この二人、まさしくアホッ子だ！

だが、アホツ子を超越すればそれは金欠となる、

と、どうしよもなく、たまたま頭をよぎった春原と同じく金髪のガ
ンダム好きな男のセリフをしゃべって見た。

「って、そんな事をやってる場合かあああああ？どうすんだ渚
？このままでは俺たちはあのヘタレと同じレベルだぞ。」

渚はそれに若干びつくりしながらも笑いながら答える。

こんな時の渚の微笑みはまさに素晴らしいとしか言いようが無いも
のだな…

だがだめだ、

春原と同じ、

そんな言葉を聞いただけで体全身の穴と言う穴から汗がにじみ出
てくる。

取り合えず我が家をこんな絶望感に陥れた春原は殴っておくとして。

「大丈夫です。お父さんに相談して手助けをしてもらつ事になりま
した。」

え？なんだ、よかつたな。

いやー、一時はどうなる事かと思ったよ。あはははははは

「だあああああああ！おっさんに頼むのは一番駄目だろおお
おおおお。」

そんな事を叫んだ瞬間、

右前方から電話の音後聞こえた。

まさか、まさか、

おっさんが返事を聞く為にかけてきてしまったと言っのか。

「あっ、お父さんからです。」

渚の声がトドメだった。

俺の心で謎の天秤に二つのものがかけられる。

一つは春原と同じレベルになる道

もう一つはおっさんに頼る道、

どちらも不幸としか言いようが無いが…

俺の中で何かが弾ける。

「それでも、守りたいプライドがあるんだ—————！」

朋也はそうイイながら受話器を取り声をあげた。

「おっさん、よろしくお願いします!」

岡崎朋也は種割れを覚えた!

岡崎朋也は春原の程度を最低ランクからさらに三段階下げた。

岡崎朋也はおっさんに頼む方を選んだ。

って、僕のランクは最低以下なんですかねええ!

なんて声は聞こえなかった事にしておこう。

翌日、

「ねえ、伽耶?あれは誰だったのかしら。」

春原よりも高貴で綺麗な金髪で和服をきた少女と、同じく和服をきた黒髪で金髪の方より背の高い少女が街を歩いていた。

支倉たちとの一件を終えた後、全国を回っていた千堂伽耶と紅瀬桐葉はとある街にて面白い格好をした金髪の以下にもヘタレそうで見ると耐えない謎の生物が配っていたチラシを目に話していたのだ。

因みにその謎の生物は二人をみるやいきなりナンパしようとしたので二度と起き上がれなくなるまで徹底的な叩きのめしておいた。これでもうやつと会うこともなくなるのだろうか…

「さあな、我にもわからない事を聞くな。それより、このゾリオンとやらはなんなのだ？」

伽耶が興味深そうに眺めているのは、先日岡崎家において発令された脱春原作戦の為のチラシ。

そんな二人の間に、ぴよこんと、小さなアホ毛が伸びてきた。

「ん？何かしら。」

桐葉がそちらを見ると、そこには幼稚園児くらいの小さな女の子が二人の後ろについてきている。

一歩進むたびにぴよこんぴよこんとアホ毛が揺れてまるで何かのマスケットの様である。

「何か用かな？」

桐葉は出来るだけ優しく接しようと思いを屈めて汐の前にしゃがみこ

んだ。

クリンとした目に茶色の混じった綺麗な髪。

汐は桐葉のもっていたチラシを指差して喋り出した、

「それ、ダンゴさんのため。」

「？」

何の事を言っているのかわからない桐葉は困った様に汐を見るが、
汐は何も言わずにそのままチラシを見つめたままである。

「おい、汐ー！どこだ〜？」

その時、遠くから大人の声が聞こえた。

おそらくこの子の保護者だろう。

「パパ！」

それを聞いた汐が嬉しそうにぴよこん跳ねて声の方へ走り出して行
ってしまった。

なんだったのだろうか？

「おい、桐葉。早く行かねばこのゾリオンとやらの事を支倉どもに

伝えぬぞ！」

そんな事を考えてその場に立ち尽くしていると、少し離れた場所から伽耶がまるで子供の様に（外見は確かに子供なのだが……）こちらに手を振っていた。

どうやらよっぽどのゾリオンとやらに参加して見たらしい。

まあ、家族団欒のいい機会になるだろうな、などと気楽な事を考えながら桐葉は、いつまでも来ない事に少々機嫌を損ねてしまった伽耶の元へと歩いて行くのだった。

学園都市……

「ゾリオン？なんだそれ……。」

青く澄み渡る空の元、ツンツン頭こと上条当麻は、学園都市一のツンデレールガンであり、恋人でもある御坂美琴と共にセブンスミストへデートにきていた。

まあ、デートと言っても正確には荷物持ち兼電撃ストッパーなのだが……

因みに、禁書目録は小萌先生の所で預かってもらっている。
ついて来られると大変だからな。

「うーん、この広告を見る限り、何か銃を使ったサバイバルゲーム
ってところかな……。」

美琴が真剣な眼差しで広告をみている。

先程、よくわからない団子の様な生物のぬいぐるみとパンを売って
いる赤い髪の男が配っていたものなのだが、これが怪しいと言った
ら極まりないのだ…

優勝賞品は島巡りの旅。

参加者全員に古河パン無料券。

初戦敗退者にもレインボーパンとやらが一週間分もらえるらしい。

怪しすぎるだろ！

レインボーパンって何だよ…

上条はおそろおそろ真剣に広告を見つめる美琴に声を掛けた。

「あー、美琴さん？まさかそれに参加するつもりじゃあ……。」

「勿論じゃない！」

どうやらすでに出る機満々の様です……

さて、銃を使うサバイバルゲームか。

「あー、ソウエバカミシヨウサンヨウジガアルンダヨ。ダカラソノ

ゾリオン二八サンカデキナイキガスル。」

また厄介ごとに巻き込まれたら話にならない…
美琴と遊べないのは心底辛いが、我が身の為だ。

と、そのまま退散しようとする上条の襟首を美琴が掴んだ。

「あんたも参加するのよ……。」

どうやら逃走には失敗した様だ…もう逃げられまい。

ああ、不幸だああああ。

いや、待てよ。

この広告に書いてある通りの日程でこのゲームが行われるのなら…
…不幸じゃないかもしれないぞ…

「なあ、それって平日も入ってるんじゃないのか？」

上条は、珍しく用意されていた最後の望みに掛けて唯一の欠点を指摘する。

が、

「そんなの緊急事態って言って、外出と外泊許可取ればいいじゃない。
い。」

あっさりと一蹴されてしまった。

どつちら、もうテロでもやめる気は無さそうである。

ああ、やっぱり不幸だああ…

そんなことを考えている上条に、美琴が急に顔を近づけてきた。ズイツ、と美琴の顔が視界の半分以上を占めるくらいまで拡大される。

「な、何ですか美琴さん？」

顔に汗を浮かべながら体を引こうとする上条だが、ソレを美琴が許さない…

「その……当麻は、私と行くの嫌なの？」

ぐはあああああああああ！

上目遣いp11usウルウル目、

これに世界の誰が勝てましようか……………
小萌先生に教えられ覚えていた言葉が頭に浮かぶ…

銀も、金も玉も、何せむに、勝れる宝、美琴にしかめやも…

ああ、あんなに否定していたのに、今は正しく見える。

こうして、

俺と美琴は謎のゲーム、ゾリオンに参加することになったのだった。

此処はプトレマイオスEE

特に戦争も何も無いからと言つめちやくちな理由から、スメラギがとんでもないことを言い出していた。

ゾリオンとやらに参加したい！

「一般人の参加するイベントにメンバー全員で参加するだど？」

ティエリアが信じられないとでも言う様に聞き返した。

ソレスタルビーイングは公に顔を晒すことを禁じられている。

特に人が多く集まる様な場所でメンバーが揃う事などもっての他であるのだ。

だが、そんな事を気にする事なくスメラギは他のメンバーに許可を得て行く。

「俺は構わない、フェルトはどうする？」

「刹那がいくなら行くことにする。」

「楽しそうじゃねえか、いくだろ、アニユー。」

「ええ、勿論よ。」

「たまには息抜きもいいんじゃないかな。」

「アレルヤ、そのセリフは空気となっている人が言うセリフよ……。」

「そ、そんな！ハレルヤ、世界の悪「俺は勿論出るぜ……おやっさんたちはどうなんだ。」……。」

「僕にもしゃべらしてくだ「楽しそうだな、たまにはこう言うのもありだろ。」……。」

ティエリアを除く全員の許可を得たスメラギがチラリとティエリアの方を向いた。

その視線は「もちろんOKよね？」とでも言う様に恐ろしいものだった。

しかし、此処で引き下がる様なティエリアでは無い、組織の為にも

ここで下がるわけにはいかない。

そう、ロツクオンの為にも！

『俺は別にいいけどな…。』

とにかくこのままスメラギの無茶を押し通させたら負けなのだ。

「大体あなたの目的はこの優勝賞品である島巡りの旅の事でしょう！」

ティエリアはイアンが読んでいた広告を取り上げてバン！と壁に叩きつけながら怒鳴った。

「そうよ、当たり前じゃ無いの！この島巡りの旅では最高級のエステが受け放題なのよ！」

スメラギがまるで天を仰ぐかのようにティエリアを見下ろしながら言い返す。

一体、何がスメラギを此処まで動かすのだろうか…

「まったく、いい年して若づくりなど…。」

ティエリアがつい口を滑らしてしまったその瞬間、その場にいた全てのメンバーが一斉にスメラギの方を向いた。

そこにはいつもと変わらぬスメラギの姿。

だが……

「ウツ……………」

ティエリアが急に鈍い声を出し、音を立てながら倒れこんだ。

スメラギの方を向いていた全員がティエリアの方に視線を移すとそこには、すでに意識はなく、その場でピクピクと魚の様に痙攣しているティエリアらしき生物がいる。

「ティエリア！大丈夫か？」

慌てたように駆け寄る他のメンバーを横目に、スメラギは楽しそうに申し込みをしようと部屋をでて行ってしまった。

部屋の床には超特大の摩擦がかかり焦げている事に誰一人気付かぬまま……

こうして、彼らソレスタルビーイングもめでたくゾリオンに参加する事となったのだった。

「音姉、何してるの？」

此処は義之の家。

いつもの如く夕食後を音姉と由夢と共にテーブルを囲んで賑やかに過ごしている中、音姉が何やらよくわからない資料を見つめていた。さすが音姉と言ったところだろうか。机の上に綺麗にまとめられたそれは、一つも折れる事なくバインダーやファイルの中に収められている。どうやら結構な数があるようなのだが…

「ん？これ。これはね弟くん、今度島の外からたくさんの方がくるイベントがあるの。」

音姉が嬉しそうに一枚の広告を顔の前に広げてきた。いや、そんな近くても見えないから……

俺は少しだけ音姉が広げた広告を顔の前から離すと、距離を取られた事にご立腹な音姉をほかって広告を見始める。

ドドン！とでも効果音がつきそうなクライドアップで印刷された文字は、「激戦！ゾリオン大会」と赤色で書かれていた。

ゾリオン？一体なんなのだろうか……と言っか、広告の下の方にすごく小さい字で、生き残るかは腕次第です、と書いてあるんですが…

今だにぷくりとほおを膨らませてこちらをみている音姉の方を向き、ゴメンゴメンと軽く目で謝りながら俺は広告を渡した。

音姉は仕方がなさそうにしつつも、なぜか笑顔で俺から広告を受け取る。

「それでね弟くん、そのイベントにお姉ちゃんたちも参加して見ようと思うんだけど……………」。

音姉がにっこりと微笑みながらこちらをみてきた。どうやら参加する以外の選択肢は内容だが……………いや、此処は何としても避けるべきだろう。

こんなイベントに参加したら体が持たない。此処は何とかサボって平和な道を…

「よっしゆきくーん！ゾリオン参加しよ！」

どうやら、神は俺の味方をしなかった様だ……………

無駄に元気の良い声と共に食卓に現れたのはさくらさん。一応俺の保護者でありこの家の主でもある人。

何かと不思議な生物を引き連れているこの人は不思議な人物で、外見はまるで中学生である。

そして部屋に入ってきたノリでわかる様に、こう言うイベントには目が無い人なのだ。今日に限ってこんなに早く帰ってくるとは…

俺はひたすら自分を呪いながら、ただ勝手に話が進んで行くのを待つ事しかできなかつたのだった。

――
――
謎の広告、

激戦！ゾリオン大会！

世界最高の人気を誇るサバイバルゲーム、ゾリオンに参加しよう。
ルールは簡単！

決められたエリアの中でお互い胸につけたバッジを狙って撃ち合う
だけ！

銃を壊しさえしなければなんでもOK、さあ、君も参加しよう。

今回の会場となるのは、枯れないさくらのきで有名なあのだ！

美しい景色にいうつとりとしそうな高台や、複雑に入り組んだ街
などゾリオンにとっては最高のステージ。

そして今回のスペシャルゲストは、ゾリオン界で赤い稲妻の二つの
名を持つ有名人、超イケメンゾリオンプレイヤー「Mr. アッキー」
だ！

ゾリオン界最強の兵士である彼が参加するこの大会、参加しないな
んて事はあり得ない！

さらに、今回はスポンサーとして古河パンや大勢の有名企業がつい
てくれた、多額の援助のおかげで景品も今までとは桁違い！

その優勝賞品はなんと！

豪華島巡りの旅三週間だあああ！

参加者にも古河パンの無料券がつくなど、すごい品揃えである。因みに、初戦敗退者には究極の一品、レインボーパンが待っているぞ。

さあ、迷っている暇なんてない、今すぐレッツツゾリオン！

それから、参加賞として全員に春原をフルボッコにして良い権利をあげます。

どうか有効利用して下さいm(´▽`)m

生き残るかは腕次第です、特に胃に自身の無い方は絶対に初戦敗退しないで下さい。

脱金欠？アッキーのソリオン作戦！（後書き）

このページでの第二作目です（^- - ^-）

更新は不定期ですが、頑張って書いていこうと思います。

感想や、参戦？させたいキャラや作品がある場合は、
どんどんリクエストいただけると助かります。

よろしく願いますm（）（）m

いや、これはやり過ぎですよ？上条当麻さん

ゾリオン、それは人々の神聖なる戦いの義。

古代ヨーロッパで二週間に一回開かれていた人気のある競技だとか

……

そして今日、桜が枯れない事で有名なあの島には、様々な人々がこのゾリオンの為に続々と集結していた……

――

――

「ふわあああ！」

ゆったりと揺れる船のなか、上条当麻ら一同は、目的地である初音島にいく前に、初音島ふくむ周辺の島々の本島となっている珠津島に向かっていた。

因みにここにいるメンバーは上条と美琴だけではなく……

「おっ姉様あああああ！」

「わーい、いきなり抱きつくなああああ！」

ビリビリビリビリビリ！

ものすごい音と共にあたりが青白い光で埋め尽くされる。

相変わらずものすごい威力だな…てか、それを受ける奴もよく死なないよなあ…

「まずいのは無いのでしょうか。と、ミサカは煙をあげている箱を見ながら心配そうに問いかけます。」

上条がそちらをみると、そこには誰が持ってきたのか丸わかりな怪しい箱を見て、再び視線を戻した。

「か！カミヤーン！酷すぎるニヤア。ちょー！やばい！せつかく旅行の為に買ったゲームせつとがああ！」

その様子を見ながらも、美琴の電撃をからでで受け止めながら謎の箱を守るうとする土御門が叫ぶ。

「仕方ねえ…。」

特に必死な土御門に驚くこともなく、上条はダラダラと持たれていた手すりを名残惜しいと感じつつも振り返り、そのまま電撃を飛ばし続ける美琴のほうへと歩いて行った。

その先にはものすごい光景が広がっている。

「おっほおお！お姉さま、黒子にこの電撃はあああ！」

こんな様子を見てみると、やっぱり止めなくていいような気がしてくる。

必至で抱きついてくる白井黒子を引き離そうとする美琴の頭にそつと右手をおいた。

同時に周りを包んでいた電撃が止まり、美琴が驚いた顔をしながらこちらを見てきた。

「な、な、なあ、何やってんのよ……」

顔を真っ赤にした美琴は上条の方を見ながらオーバーヒート寸前まで迫っている。

向こうの方では土御門が目には涙を浮かべながら恐らく無事だったであろう箱の中身をみていて、それを小萌先生が慰めていた。

二階のテラスの方からはスタイルたちが必死で禁書目録を抑えている。

「どうやらうまく収まったようだな？」

「そこをどきなさいな類人猿？お姉さまあああああああああああ
ああー！」

ものすごい声とともに、電撃を使えない状態の美琴をみた黒子が、

ゴメン、やっぱり無理かもしれない…

怪しい笑い声をあげながら黒子は両手に金属の針を持った。

ヤバイ…

怪しくギラリと輝く金属の針に加えてあのだす黒いオーラ…

「死んでくださいますし、このゴミが！」

その言葉を聞いたのと同時に俺は美琴を抱えて走り出した。

「不幸だあああ！」

朋也にはハプニング！トレミーにはなつかしの人々が？（前書き）

お待たせしました、久しぶりの更新です。

こんなんで大丈夫か？

大丈夫だ、問題ない！一番、良いコメントを頼む！

「文才ないですね（笑）」

……ああ、

何が言いたいのかって言うと、更新遅いのに僕の文の質は上がらないね！です…

朋也にはハプニング！トレミーにはなつかしの人々が？

上条一行が球津島に向かっていく頃と同時刻…

クラナドメンバーはいよいよ開催が近づいた初音島で行われるゾリオン大会の準備のため、船で島へ向かっていた。

陸についたときの用意の時間を短縮するため、既に船上で行える用意を手分けしてやっているところである。

乗っているのはおなじみのメンバー、

岡崎家に早苗さん。（ちなみにおっさんは先に最高のゲストを呼ぶためにどっかの秘境までいくと言って今は席を外している）
そして藤林姉妹に智代とことみ。あと芳野さん一家に芽衣ちゃんと美佐枝さん、それから…

「ふあーあー！疲れたあ……ボゲラア」

一人の金髪の男が、船上で大きくあくびをした所に一冊の辞書が当たり、一気に鉄製柵の方まで吹き飛ばした。

さらに、それは止まる事なく鉄製柵をひん曲げながら越えて、その

まま海の中へダイブ。

これでもかと言っくらい大きな水飛沫が上がる。

そして鼻血の匂いに誘われたサメに食われてさようなら。

どうやらもう後1人くらいいた気がするのだが、説明の必要はなかったみたいだな。

あわれ春原、陸につく事どころか説明さえも省かれていなくなるとは……
せめてこの場で弔ってやろう。

と、そんなにうまく事が進む事もなく、お馴染みの驚異的な生命力と人並外れたゴキブリ並みのしぶとさによって船上に這い上がってきた変態春原。

既にすごいを通り越して気持ち悪いのレベルである。

のっそりと這い上がってきた春原は、どくどくと流れ続ける鼻血を気にする事なく、思いっきりさげんだ。

「よ、よくも……誰だ！こんなゴリラ並みの馬鹿力で僕を吹き飛ばした奴はあ！」

ゴッ！

返事の代わりに飛んできた辞書が春原の顔にめり込む。

しかも今度のは金属の縁取りがされたタイプのだ…

「誰がゴリラ並の馬鹿力ですってえ！ああ？何か言いなさいよ！」

二階のテラスから紫髪の女性が肩で息をしながら顔をのぞかせている。

どうやらかなりお怒りのようだ…

「朋也くん。こっちの片付けが終わりましたよ。」

「おわったあ！」

と、その時、後ろからよく聞き慣れた声が聞こえた。
まあ、当たり前か…

なんたって後ろにいるのは素晴らしきMYファミリー

「おう、ご苦労さん……って、なあ！」

振り返った先に映った光景に、思わず驚いて声を上げてしまった。

そこにいたのはダンゴ（だんご大家族シリーズver.2・3）を抱えた渚と汐…

と、

背の高いコートを着た人型猫…

うん、何かおかしい。

「なー、なー、なー、な…はあ、俺って疲れてるのかあ？」

ゆっくりと深呼吸、目をこすってさあもう一度…

目に映っているのはダンゴを抱えた渚と汐、

それから…

背の高いコートを着た人型猫…

顔の半分近くを占める大きな目に加えて怪しくかぶった帽子。

そして、人にあるはずのない耳…

あ、とある出来事からおっさんに猫耳をつけられた時の渚はとても素晴らしかった。

いや、本当もう俺とおっさんが同時に畳にダイブして転がり回る位に…

そんな事はさておき、

「渚、汐、俺はもうダメかもしれない……。」「

どうやら俺は完全に春原に汚染されてしまったようだ。

見えないものまで見えてくるようになってしまった…
もう、何なんだそれは…

イヤイヤ、人は極限まで進化した時、人知を越えたものを目にする事がある…なんて声が空から聞こえたりした気がする……

この声は、幸村のじいさんのか…

あは、あははははっ！

「って、なんだそれはあああああああ！」

海上に俺の怒涛の叫びが響き渡る。

ありつたけの酸素を使い果たす勢いで叫んだ俺は、驚いて耳をふさいでいる渚と汐を視界の端に捉えたのを最後に、ゆっくりとその場に倒れた。

なんかもう、最悪だ…

「何故だ、何故こんな事になっている…。」

ブトレマイオス？、通称トレミーの中で、刹那は何とも言えないカオスな光景を前に声を漏らした。

いや、本当にカオスな光景である…

溢れんばかりのよく知る人々がトレミーの至る所で自由に過ごしながら初音島への到着をまっていた。

いや、本当によく知る人物ばかりだ…

ここへ行く事が決まり、一同補給のために地上に降りたのが半日前。ちなみにその間刹那はフェルトが作ると言った料理を食べるために半日の間何も食べずに部屋で待っていた。

そしてやっとの事で完成したフェルトの手料理を完食して、フェルトとともにブリッジに行こうと部屋を出たのが一分前。

その間に、一体何があったのだろうか…

そんな事を考えている間にも当たり前前の様に様々な人々がすれ違っ
て行く。

いや、何か白髪でヨボヨボの有名なご老人がいたり、

金髪でキャラが被るからと言う理由で登場回にして死亡フラグを立
ててそのまま逝ってしまった口の悪いやつがいたり、

かの凡人青年の姉と思われる記者さんがいたり、

本当に、一体何があったのだろうか…

「おう、刹那！でかくなつたな。」

その中の1人、懐かしい人物が声をかけてきた…

茶色の髪の毛、自分よりも背丈の高い人物、
自分の兄と言っても過言ではないと思える位自分を変えた男の声が…

「ろ、ロックオン？なぜ？」

驚きと喜び、いろいろな感情が混ざり合いながら刹那は声を上げた。

隣ではフェルトが目を見開いて固まっている。

当然だ、目の前には死んだはずの人間が何ともない状態で立っているのだから…

ロックオンとの感動の再開の後、あの子の世界がどうなったのかなど色々な事を話した。

アロウズのこと、
イノベーターのこと、
リボズのこと、
何故か先駆者となったこと、など話せば終わりが無い位だった。
(ついでにわかったことだが、天国には美味しいパン屋があるそう
だ……)

しかし、ロックオンは話の度に何故俺とフェルトと一緒にいたのかだとか、いつからくっついたんだとかで質問する側のはずが、何時の間にかされる側に回ってしまい、予想以上に時間を食ってしまった。

「で、ロックオン。何故こんな事になっている…」さて、何よりも俺が一番聞きたいことがあるんだが…。」。

ある程度の思い出話も終わり、刹那が話を切り出そうとしたその時、ロックオンが突然真面目な表情になった。

刹那とフェルトは、ロックオンが何を言い出すのかと不思議に思いながらも黙ってロックオンの方を見る。

「あんな、一つ聞きたい…。」

ロックオンがしずかに喋り出した…

ゴクリ、とつばでも飲み込む様な音が聞こえてきそうな位の静寂。

そして、

「おまえら、どこまで行ったんだ？」

まずい！

いち早くその言葉に反応した刹那は、イノベーターの力を発動したすぐさまフェルトの周りにある飛び道具となりかねないものを取り除いた。

これで少なくとも周りが巻き込まれる様なドジは踏まないはず…

しかし、

ガチャアアアア？

「どわぁ！ちやー！！」

ロックオンの顔にいらたてのコーヒーがマグカップのおまけ付きでかかった。

あわてて飛び上がるロックオンではなくマグカップをキャッチする刹那。

「くっ、これを飛ばすとは…。」

もちろんロックオンの方にマグカップを飛ばしてしまったフェルトは既にどこか彼方のお花畑へと旅立っている。

相変わらずの、フェルトだった…

三十分後…

「いや、何つーかあれだ。ほのぼのに死亡キャラの話を入れるのがめんど…いや、大変だと思った作者さんがどうせならみんな復活しちまえて生き返らせてくれてよ…。」

先ほどの件で反省したのか、ロックオンは二人を茶化す事はやめて、大人しく質問に答えることとなった。

因みに顔には軽くやけどをしたのでガーゼが当てられている。

「まあ、何だかんだで今のトレミーにはみんな乗ってるって事だ！」

ロックオン曰く、既に他のメンツへの挨拶はおわつたらしい…

その後の話では、カタギリとか言うヘタレはスメラギがエミリオとか言うのに取られて酒に溺れていたたり、

ハム仮面とか言うのがブシ仮面と日替わりで入れ替わる様に姿を表す様になったとか。

金ジムにはまったワイン好きの大使がりボンズに復讐したがっているだとか、

本当にこんなので大丈夫なのだろうか…

行く先を心配しながら、誰にも気づかれる事のないため息をつく刹那であった…

朋也にはハプニング・トレミーにはなつかしの人々が？（後書き）

僕知ってるよ、この作者ダメダメなんだよ！
でも頑張ります！受験なんかは負けてたまるか、

やっぱり無理ですかね^^；

ソリオンに魔術はありなの？まあ、なんでもありです？

「さて義之くん！次はどここのステージの設置を手伝う？」

晴天、

青空の下、義之は金髪のツインテールを揺らしながらはしゃいでいるさくらをみてため息をついた。

なぜこうなっただらろうか…

いや、なるべくしてこうなっただらろう。

初音島メンバー限定、優勝商品に加えて義之を三週間連れ回している権利。

なんとも迷惑な追加商品だ、当然のことながら本人の許可なんて得ていない。

しかもこの事が告知された三日前の朝から音姉や由夢、その他ほとんどの女性陣の姿が見えなくなってしまった。

ほんのうわさではあるが、何やら五十年前から隠されている伝説の

修業場所にいつているだとか。

しかもそれを伝えてくれたのはあの杉並だ、怪しい限りである……

涉には「このラブルジョア！」とか言っただけながら殴ってくるし。

「はあ、不幸だ。」

ん？いま誰かとシンクロした気がする……いや、気のせいかな。

「ほらほら早くしないと開催日に間に合わないよお！」

遠くの方でさっきよりさらに声を上げて自分を呼んでいるさくらさん。外見だけみたら絶対に元気な中学生だよなあ……

しかも最近はずっと小さくなってTPさくらなんていって市場を盛り上げてるし。

と、そんなことを思いながらも義之はため息を尽きながらさくらの元へと歩いて行くのだった。

「久しぶりですね……一体なんのようでしょうか？」

学園都市。その中の一つのビルの屋上に彼女はいた。

女性としてはかなり背が高く、スラリと伸びた脚には無駄のない具合に筋肉がついている。そして片手にはとても女性では扱えそうのない長い刀が鞘に収められて握られていた。

その後ろには夜中にもかかわらずサングラスをつける謎の赤髪の男…

その腕には本物そっくりの銃が二丁ほど握られていた。

「アレイスターはもう動いてもらった。もちろんローラの嬢ちゃんもだ……と、いうことでゾリオン、でないか？」

不敵な笑みを浮かべながら赤髪の男は片方の銃を女性の方へ差し出した。

「それは…私に勝てたらにしてください…。」

女性、神裂は一瞬にしてその銃を振り向きざまに取ると、そのまま赤髪の男の方へ向けた。

それに反応して赤髪の男はすぐ横へと飛び込む。

「へっ、やっぱりそうなるよな！」

嬉しそうに赤髪の男が声を上げながら小さなバッチのような物を神裂に投げつけた。

「そちらこそはじめからやる気だったのでしょうか！」

走り込みながら神裂はそのバッチを掴むと、そのままシャツに取り付けた。

「ゾリオン！カイシシマス？」

電子音が二人のバッチから響く。

「ゾリオンの赤い稲妻でしたっけ？いいあだ名をお持ちですね？」

神裂がビルの給水塔を駆け上りながら赤髪の男に向けて引き金を連続で引く。

しかし、それは一発もヒットを示す音を鳴らすことなく外れた。

赤髪の男は壁を蹴って移動しながら次第に神裂との距離を詰めて行く。

追い詰められた神裂は魔術をつかってビルを飛び移った。

おそらく反則に限りなく近いのだろうがまあこの際別に構わないであろう。

しかし…

「魔術とはまたセコイなあ！」

赤髪の男はなんと何も使わずにただ飛んただけでそのビルまで軽く追いついてきたのだ。

毎回ゾリオンで対決するたびに様々な人並外れた力を使うこの男だが、今回はそれにさらに磨きがかかっている。

「まったく、あなた本当に人なんですか？」

神裂が頬に冷や汗を浮かべながら一瞬動きを止めていった。

少しでも動きを止めれば此方がやられる可能性が高いのだが、これだけは聞かすにはいられなかったのだ…

しかし、何を思ったのかアレなの男も動きを止めて答えてきた。

無駄に動きにくくて暑そうな服をきている男には汗一つ浮かんでい

ない…

「まあな！だが幻想殺しとかいうガキのためにこんな服まで着るあんたよりマシだろ？」

その言葉と同時に赤髪の男がポケットから大量の写真を撒いた。

そこには旗男上条当麻のために土御門に用意されたアレな服を着た神裂の姿がバツチリと収められている。

「…？@×\$°||* + /？」

声にもならないような声を上げて神裂はその写真たちがビルからハラハラと落ちて行くのに追いつき、ご自慢の刀でビルを駆け下りながら粉々にして行った。

当然、それに全てを懸ける神裂には隙が見える訳で…

「はっ！俺の勝ちだな…。」

ビーイーイーイー！！

神裂のバツチからつるさい位の音量で電子音が響いた。

ついに開会式！デリカシーの無い奴には鉄槌を…

快晴！

初音島の海岸広場に役者は揃った…

人数はおよそ……ごめん、数えれない。

蒸し暑さは学園都市を軽く凌ぐものだが、恐らくそれ以上の原因はこの会場の盛り上がり具合だろう。

なんていうか目が若干いつてしまっている人も周りを見渡せばザラにいるぐらいだ…

本日は待ちに待ったゾリオンの一日目である！

特設ステージに赤髪にグラサンのいかにも悪そうな男が現れた。

因みに、私こと上条当麻は現在その大量に集まった人々の中で、皆さんお馴染みツンデレールガン美琴と共に直射日光が遠慮なしに当たるこの場所でサイダーを片手にダラダラと話を聞いている。

既にこの島の町長やら理事長やらからの話があったのだが、そんなくだらない話は全く耳に入っていない。

なんで上条さんはこんな辛い目に遭わなければならないのでせうか…

と、そんなことを考えていたその時であった。

「ゾリオン！やるぞおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおお？」

ものすごい爆音が会場全体に響いた。

それはマイクで音を増幅する必要が無いんじゃないのかってくらいすごい声だった。

周りにいる人々全員が一斉に耳をふさいぐ。ひどいやつはそのままその場でしゃがみ込んだり倒れたりしているやつも…

「くうくうくう？おい、美琴？大丈夫か？」

必死に倒れるのを我慢しながら声を上げて美琴の方をみると、そこ

には涙目になりながらフルフルと頭を降って耳を塞ぐ姿が…

ぐはぁ……………

上条当麻は精神的ダメージ超強度の可愛さに完全にしびれてしまった。

上条当麻に99999のダメージ！

今すぐ抱きしめたいぐらいの勢いだが、そんなことを公衆の面前でやればそれこそ大問題だ。

もう一度美琴の方をみる…

「と…とつまぁ……………」。

がはぁ…

ギュッと、袖口をつかまれ俯いて寄りかかってくる美琴。

金髪の男の名前は千堂伊織、圧倒的なルックスとその人の良さ？で学園からの圧倒的な支持を誇る年齢詐称の高校生。

そしてそれに別に対応している訳でも無いのだが銀髪の男、隠れシスコンの東儀征一郎。

二人は一足早く大会の特別枠でのエントリーを済ましていた。

理由、

そんなものは簡単である。

伊織は常にこの様なイベントを盛り上げる男。なら下準備は必須のもの。

人々が（主に瑛里華と支倉だが…）楽しめる？ための様々な用意を設置するために一度も訪れたことの無いこの初音島を隅々まで探索していたのだ。

そしてゾリオンの開催日である今日がこの島を訪れて四日目…

征一郎は妹が参加すると決まった三日前に伊織の元へと合流し、愛する妹に気概が絶対に加わることの無い様に伊織の仕掛けたトラップなどに細工をしていた。

目的は違えどともに行動することになってしまった二人は、会場で楽しそうにしている瑛里華たちの姿をみると軽く微笑みながらつぶ

やいた。

「これが支倉君の開いた未来か………こんな道が開けるのは彼だけだろうなあ。」

「確かにな…支倉はこの錆び付いていた千堂と東儀の全てを砕いてくれた。そこは認めるべき所だろう。」

二人にとって逃れられることのできない運命と思われていた一つの因縁。

それでも抗い続けてきた伊織にとって、それを変えることがどれほどのものかは十分にわかっていた。

だが、彼は、支倉はやってのけたのだ。

長く錆び付いた鎖で縛られた強い力に打ち勝ったのだ。

1人で、表で見る限りなんの特別な力も持っていないはずの少年が、自分とくらべて圧倒的に少ない年しか生きていないはずの1人の男が…

伊織と征一郎はそんなことを考えながら静かに反転すると、見晴らしの良い丘を後に森へと向かって行ったのだった。

よく考えてみれば、トレミーのメンバー用の制服が出来てからフェルトの私服を見ることは滅多になかった。

あつたとしても数回、それも冬場に二人で休暇をもらえた時のことで今となりで着ている様な服をしているのを見るのは始めてである。

「しまった……警戒を解いていた……。」

そんなことを考えていると、折角キープし続けていた脳量子波での探知が途切れてしまっていた。

どうやら此処の雰囲気になれているのか、どうも集中することが出来ていない。

なんなんだこの感覚は……

というかこの場所に集まっている人々の脳量子波は特異なものが多い気がする。

刹那は今回のイベントに参加するに当たって二つほどティエリアから命令を受けていた。

一つは1人で単独行動に出してしまったスメラギの確保と彼女によって連れ去られたエミリオと呼ばれる人物の保護。

此方については恐らくゾリオンの最中に行うことができるであろう。

そしてもう一つ、それは復活した人々の中に紛れ込んでいると思われるリボンズの発見であった。

ロックオン（ニール）の話を信じるとするならばリボンズが過ちを犯すことは無いだろうが、残念なことにこの前までの彼は物凄い人物を怒らせてしまっていた。

金持ちでワインが好きで国連大使さんだったあの人物、

アレハンドロを…

だが、先ほど述べた様にここには特異なものが多すぎるのだ。

しっかりとそれに集中していなければその大量の色によって周りに紛れているはずの探しているものが見えなくなってしまう。

「さて、どうしたものか…。」

と、呟きながらも結局フェルトの方に視線がいつてしまい、ろくに成果をあげることのできない刹那であった。

「ふふふ、ふふふ、やっぱりこうでなくちゃね…。」

暗闇のなか、モニターに映る刹那とフェルトを見ながら一人の女性は静かに笑っていた。

見た目だけみればグラマラスな美人だが、その何かに目覚めているような暗く濁った瞳はそんな気持ちを一瞬でうち砕く勢いである。

「そうそう、此方も面白来ことになりけるに。いけなしよスタイル、こんな風にあの少女に手を出しては……ふふふ」

そしてその反対側にはツンツン頭の少年とツンデレールガンの少女が昼間から暑くるしいピンク色のオーラを出しているのと同じ様な目で見ている金髪の少女がいた。

そしてその後ろには神父の格好だけをした神父とは全く思えない赤い髪の少年が肩を震わせていた。

「ア…アークビショップ…それはどういう意味ですかねえ?。」

あくまでも冷静さを装いながら少年が尋ねる。

「そんなの決まりけることよ…貴方の外見なら犯罪にもなりかねない過ちは起こしてはいけなしことなのよ…ふふふ。」

ブチン!と何かが来れる音がした。

「ふざけるんじゃないやねえ…好い加減にしやがれえ?。」

先ほどまでの口調とは変わって荒々しく怒りに任せた怒鳴り声が響いた。

「だいたいあんたらはイイ年こいて盗撮か?なんだその趣味は!いかれてんのかクソ野郎がああああ!。」

ステイルが怒鳴りつけたのと同時に何かが動いた…

「うん、やっぱりダメね、何も分かってないわ。」

悪魔の声とともに…

そして間もなく意識を手放したステイルがその場に崩れ落ち、何時の間にかスメラギはその首根っこを掴んだままどこかへ去って行ったのだった。

刹那の苦悩、そして金髪ヘタレの存在は何をもたらすのか？（前書き）

長らく空いてしまいましたが連載再開します

刹那の苦悩、そして金髪ヘタレの存在は何をもたらすのか？

ゾリオンルール説明。

各自必ず協力者となる人物が四人まで選ばれる。

基本的には何でもあり、ただしゾリオン用の銃を使つての攻撃で胸元のバツチを撃つた時しか得点は入らない。

生命に関わるような攻撃は全て初音島の力によつて人が死なない程度になるようになってるので使用するのはOK。

相手や自分のバツチを外す事や壊す事は禁止とする。基本的には攻撃程度では壊れないので大丈夫。

島外への脱出は認めない。

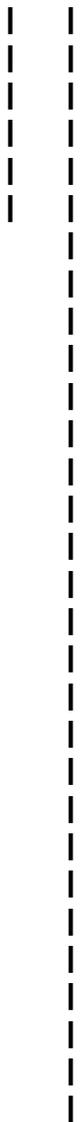
一人撃つごとに三ポイント、撃たれた場合は一ポイントマイナスされる。

各自は所持しているポイントを使って様々なサポートアイテムなどを手に入れる事ができる。特別ゲストのアッキーふくむ八人のゲストチームは、一人撃つごとに十ポイント獲得。彼らは勝ち抜けする事はなくただ敵としていただけなので勝ち抜けの順位などで恐れる事は無い。

島には説明不能な生き物や様々な危険性が紛れ込んでいるので注意せよ。

5発以上の被弾を連続（5発撃たれる間に敵を撃つ事なく）受けた選手は、秘密の力的なもので強制的にそれぞれのチームのスタート位置に戻され、それまで獲得していた個人ポイントとアイテムを全て失う。

初戦の最大延長時間は一週間。それまでに規定数以上が勝ち抜けなかった場合はその時の得点が高い順に決める。



Aブロック

「何も見つからないな……。」

「そうだね、それにちょっと暑いかも。」

「なあなあピアスくん、前にいる二人って周りの環境とか考えているのかにゃー」

「せやなー、こんな暑い日にあんなとこ見せられたらたまりませんなあ」

と、まあ口で入っているものの二人にとってはそんなのはこの暑苦しさをほんの少しだけ上げるにすぎず、それ以上にこの場を蒸し暑くさせている問題はその奥に見えるチームであった。

「このゴミがア！触んじゃねエ。」

バキッ

骨が折れたような痛々しい音が森の中に響きわたる

「ゴブあ！…ッー。ひどく無いっすかねえ？僕こんな酷い目に遭うつもりないし、てか今は仲間だから仲良くしようっていっただけじゃん？」

少し前のほうを歩いていた金髪の男が白髪の少し細めの男に蹴り飛ばされていた。

世界でもっとも生命力の強いとされる生物、金髪ヘタレの変人、春原陽平

いや、正確には蹴り飛ばされたように見えただけで金髪のほうは白髪には触れていない。

(まあ、そこまで見ることができるのはその能力の正体を知る土御門と驚異的な力をもつ刹那だけであるが…)

かなりの勢いで蹴り飛ばされた男が地面にめり込んだ体を引き抜きながら立ち上がった。

「うわっ、この人なんか変な目で見てくる〜！って、ミサカはミサカは関節がおかしい方向に曲がった金髪の物体をみながら引いてみたりい？」

「うはあ！へ、へへへへへ……。」

白髪の男の横でびよんぴよん跳ねている小さな少女が金髪のオトコに向けて近くにあった石を投げ付けている。

見る限りではかなりの勢いで投げられているので大怪我になるような気がするのだが……

どうやらその男はそれに快感を覚えているようだ。

「全く、なんであたしがこんなのに参加しなきゃいけないのよ？」
その横にはそれに便乗してゾリオンの物ではなく本物の銃を発砲する、跳ね回っている小さな少女に似た高校生位の女の姿もある。
かなり銃火器などに馴れをしているのか弾丸は確実に金髪の体をかすめるように撃たれていた。

「あぎゃ、死ぬ死にますからねええええ×っえっえ f f h k j h b
f j d s h v k f」

それに驚いてその場からはねた春原は一方通行の蹴りがクリーンヒットするのと同時に地面に今度は体全身を釘のように打ち付けられた。

「はあ、なんでこうなるかなあ……。かつこいいお兄ちゃんのはずなのに……」

そしてその様子をあまりのかなしさに呆れながらつぶやく黒髪の少女。

とその後とまた再び再生した春原がフルボッコにされるといふ無限ループが先程から続いているのである。

「フェルト、俺は正直あの前にいる連中には関わりたくないんだが
．．．」

その光景を見ていた刹那は少しだけ苦笑いをしながら隣をあるくフェルトに話しかけた。

たしかに目の前の光景を見ていれば誰だってそう思うだろう。
だが、

「でもヴェーダからの情報だと勝つためにはあの金髪の人の生命力の解析が必要だって、あと白髪の人の協力もできれば受けたほうがいいって．．．」

そう、この大会を機にヴェーダは以前から気になっていたあの春原の解析を試みていたのである。

そしてこの大会で勝つための戦術予報を組み立た際にこの春原が協力してくれた場合の勝率がなんと95%という異例の数値を叩き出したのである。

作戦である以上刹那たちが彼に接触しなければならぬ．．．
しかし、二人にもやはりプライドとか失ってはならないものが確かにある。

「はあ
」

イノベーターとなった彼が頭を抱えるほどの問題を常に持ち続ける
春原、彼の実態とは

刹那の苦悩は続く

ゴーレムシリーズ参上！そして二人の嵐といっくんがやって来た！（前書き）

久々の投稿、忘れられていますかね（ー；）

ゴーレムシリーズ参上！そして二人の嵐といっくんがやって来た！

いよいよはじまったゾリオン、赤い稲妻が駆けるこの初音島で各々はなんのために戦うのか…

それは誰にもわからない。

君は、生き残れるか？

「あろう、御坂さん？」

「フン！知らないわよ……。」

「いやいや、上条さんなんか悪い事したんでせうか……。」

「そ、それは……そうじゃなくて……その、あの、……べ、別にいいじゃない？」

バリバリつと青色の閃光が美琴の額から走り、それとともに髪がふわりと浮く。

これは間違いなくツンデレールガン発動中の知らせである。

こうなった理由はかれこれ数十分前に遡ります。

ゾリオンの赤い稲妻による大音量説明会が終わったあと、わたくしともう一人の相方は二人で同じチームとなる上条アノド御坂ペアの元へと訪れました。

しかし、なぜか御坂さんの方は気絶中。それを上条さんが周りの目も気にせずお姫様抱っこと呼ばれる巷ではフラグ乱立者がよく使う事で有名な技を使って抱きかかえており、我々と自己紹介タイムになりました。

しかしアクシデント発生、

その途中で御坂さんが目を覚ましてしまい我々の前ではなかなか恥ずかしい状態だったらしく顔をなぜか赤くしながら地面に降りた御坂さんはいきなりスパーク、どうやらそれが彼女の能力らしく上条さんは反応出来ずに感電…

結局上条さんが目を覚まして目的の場所までとりあえず歩く事になりました。よくなったのですが先ほどの事をスパークが原因で一瞬忘れてしまっていた彼の一言で再び口論に発展。

わたくしからすればわけのわからない状況の連続でした。

と、まあ今も大絶賛喧嘩中の、と言っても一方的に美琴が無茶を言っているだけだが、上条アンド御坂ペアは周りから見ればただの惚気としか言いようが無い口論を目の前で繰り広げているのが現状です。

え、今さらだけど喋っているのは誰だつて？

おっと、紹介が遅れました。

わたくしは今回の試合の実況を務めさせていただきながらも上条ア
ンド御坂ペアのチームの一人として参加させていただく人工AIの
「ゴーレムI」でございます。

ついでに隣で歩いているのは「ゴーレムIEIE」わたくしと同じA
Iでありながらもわたくしのデータから作られたいわば兄弟のよう
な存在であります。

因みに生みの親は「マジカルラブリーな天才ウサギ」さんとデータ
バンクには記載されています。

この初音島に配備されたゴーレムシリーズは全員で十体、その内試
合参加するのは四体でゴーレムI型がわたくし含め六体、ゴーレム

III型は四体です。

へ？外見はどうなのよって…

外見は至って普通でありますが……

まあここで簡単に我々のスペックについても説明しましょう。

わたくしの身長は2m3cm、頭髪は紫で我が生みの親と同じ色です。

必要に応じて最大約1m前後までなら身長を操作出来ます。

それぞれ一応一般人にも区別がつくようにゴーレムI型の容姿は紫髪で顔立ちが少し似ている程度に設定されています。

性別は一応男、身体能力はだいたい50メートル走を1秒で走り八階建てビル程度なら片腕で持ち上げられ握力は大体1t程度でしょうか。

他には動体視力は弾丸が止まって見える位で光も集中すればかろうじてそれが進んでいく様子を伺える位ですね。

あ、全然関係無いのですが常に頭にはウサ耳がつけられております。これはどう考えても邪魔にしかならないのですが、なぜかここから我が生みの親からの指示や観測結果を送受信するプログラムや装置が詰め込まれているので外せないのです。

ゴーレムIIIは基本はわたくしと変わりませんが量子変換した武装の数が少し多かったり性別が女だったり多少無口だったりします。

こちらもちろん紫髪で四体のうちロングヘアが二体でショートが一体、セミロングが一体容姿はかなり良くしたそうですが、わたくしにはよく分かりませんでした。

さてさてここからはわたくしの独り言、

どうやら以前わたくしがISとして戦った時に出会った少年、確かに名前を織斑・唐変木・いつくんでしたか、そしてその後ゴーレムIEEIであったという少女、確かラブリーしのん・篝ちゃんでしたかね、まあ篝さんでいいでしょう、の二人の生体反応がこの島から観察されているのですがなぜでしょう……

我らが生みの親からもらった情報では織斑・唐変木・いつくん（面倒くさいので以後いつくん）はこのイベントには参加しない筈なのですが：おや、さらに増えましたね、ふむふむどうやら篝さんといつくんは二人でいてその後ろから四人程……あれ、さらにその後ろに二人程遭遇記録のある人間の生体反応がありますね。

登録名は確か最初の四人がリンリン、セリコット、デュノル、あと、ラビットでしたかね？

え、違いますって。

すいません、やっぱり記憶力はゴーレムIEEIの方がいいみたいです。

あ、後ろからついてきてるのはたしか、ざしき・矛なしでしたか、

その横にいるのがその妹のざしき・かんきりでしたっけ？

「……………なんでゴーレムIEIEはそんな目でわたくしを見るんですか？」

仕方が無いでしょう、わたくしは記憶力では絶対にあなたには勝てないんですから。

と、まあそんなこんなしている内に何時の間にかバトルスタートをする事ができる地点までやってきました。

「悪かったよ美琴…その、なんだ…いやだったよな。」

「いや、そうじゃなくて…その、逆に嬉しかった／＼／＼…ううん、大丈夫、気にしてないから。」

「そっか、じゃあ頑張るか？」

「ええ、本気でいくわよ？」

どうやら前で喧嘩をしていた上条アンド御坂ペアも和解してAIのわたくしですら砂糖を吐き出しそうな位甘い空気を醸し出しています。

まあこのていどなら任務に問題は無いですね…

あれ？

前言撤回させていただきます……………その、あまりよろしく無い
報告なんですけど、たった今さらに生体反応があつて……………

その人がその…あの…

我々が生みの親にブリュンヒルデなんですが…

ゴーレムシリーズ参上！そして二人の嵐といっくんがやって来た！（後書き）

感想お待ちしてます）、）、（）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5295q/>

ランダムドリームワールド！

2011年10月8日01時21分発行